
死季

泉水慶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死季

【Nコード】

N2763Y

【作者名】

泉水慶

【あらすじ】

世界の最後に、一人残ってしまった人間の手記。

season of death

私は海を見ている。

辺りに人の影はない。

風と波音だけが響く、冬の海だ。

ここは、

私が幼少の頃、家族と過ごした海だ。

私の青春時代に、仲間と遊んだ海でもあり、

初めての恋人と、未熟な愛を囁き合った海でもある。

妻と二人で訪れた海でもあり、

我が子連れ、戯れた海辺でもある。

それらは全て、過去のことだ。

今は私一人。

誰もいない。

この海を眺めていると…

もう返らない季節が次々と浮かんでは、消える。

私は長く生きた。

裕福だった日も、貧しい日もあった。

まだ見ぬ未来を夢みた日も、

先の見えない将来を案じた日もあった。

誇らしかった日も、惨めだった日も、

思い悩んだ日も、がむしゃらだった日もあった。

怠惰な自分を責めた日も、
人から褒められた日も、
心の底から幸せを感じた日も、あった。
だが、本当に不幸な日は無かったように思える。

忘れてしまったただけだろうか。

泣いた日も、笑った日も、
勝った日も、負けた日も、

愛した日々も、愛された日々も、

自分のことばかりを考えていた日々も、
他者に思いを馳せた日も、
恋焦がれた日も、あの身を貫く喪失も…

みんな、過ぎ去った日々。
記憶だ。

今ここにいるのは、過去を振り返るしかない、
一人の孤独な老人だけ。
それが私。

これからを考えられない人間は、過去に思いを馳せるしかない。
そうか…
私は、とっくに終わっていたか。

生きることは、形を保つことだろうか。
私が死んで、この海へと還っていくのかはわからない。

しかし…自分ではないものにつながっていくのが死なのかもしれな
いと思う。

生きてるうちには決して一つになることのなかった、

この大気に、

空に、

雲に、

砂浜に、

風に、

海に、

目にみえない無数の生物たちに、

拡散し、

溶けてゆく、

自分と、自分以外の全ての他者の境界線は消える。

それが、死。

引いては寄せる波が、思い出を一つ一つ掬っては溶かしていく。

記憶の断片が、

飛沫に碎け、遠く、遠く、

空と海の境界に届く、

その頃にはもう、

私が生きた季節は、

終わりを告げる。

風よ。

波よ。

私が生きた季節を浚い、運べ。

あの空と海との水平線の向こうまで…

「私が生きた軌跡は、一瞬の残照を残すだろうか」

私の最後の言葉に答えるものは、もう、どこにもいない。

神林光臣

孤独の海原

世界で、自分一人きりになってしまふ。
幼い日にそんな夢をよく見たものだ。

見渡す限りの海。灰色の空。太陽は見えない。

筏のような、全く頼りない代物に身を任せ茫洋とした海面を漂う。
いつの間にか私は知っている。

自分以外の生命がこの世界からすっかり消失してしまったことを。
海の向こうには、ただ同じ海が広がるだけだということを。

まるで迷子になった自分を自覚した瞬間に、心細さが湧き上がり
泣き叫ぶ子供のように、気付きは現実の少し後に訪れる。

それは決まって、風邪をこじらせ高熱を出して毛布にくるまって
いる日に見る夢だった。

夜中に何度も目を覚ます私は、その度に隣に眠る母親の手を握り、
自分が一人ではないことを確認するのだった。

しかし、それが私の人生において現実のものになるとは…年を重ね
ね大人になるにつれ、想像さえしないものであった。

私一人になる。

そんな、ありふれた想像が現実のものと化してしまつたら、
もうどうしたら良いのかわからない。

救いは眠りだけだ。

夢の世界では、時々誰かに会えるのだから。

懐かしい人よ。

愛した人よ。

分かり合えず、仲違いし疎遠になってしまった友よ。
誰であつても構わない。

今宵も、

あの川を渡つて、私に会いに来てくれと願いつつ、
私は取り残された世界で眠りに就く。

神林光臣

夢の効用

私にも夢があった。

叶いそうな夢も、

到底叶うことの無さそうな夢もあった。

少し形を変えて実現できたものも、

いつの間にか姿を消し、時折残像のように影を見せるだけの存在になったものもあった。

思い描いたままに現実になった願いは、一つも思い出せない。

夢の効用とは…

暫しの間、少なくともその賞味期限が切れるまでは、現実を見る目を曇らせてくれる。

絶望を遠回しにしてくれる。

せいぜいが、その程度の力しかもたないのだろう。夢などというものは。

多くの場合、叶う願いとは、客観的な視野に繊細で柔軟な見通しを立てたプランと、地道な努力の継続によって支えられた当たり前前の結果でしかない。

夢を見続けるには、現実を見ない才能が必要であり、

夢を叶えるには、現実を見据える目と行動が必要なのだ。

私は、どうやら夢を見続ける才能が欠けていたようだ。

今の私には、灰色にくすんだ世界の色彩を変える目を持つことが出来ないし、

現実から逃げきる力を持たない。

私に言えることは、これだけだ。

「借り物の言葉は何物をも掴みはしないし、何者にもなれはしない」

ああ…青い空と雄大な大地を見据えたあの目を、もう一度取り戻したい。

願いは言葉にした瞬間に、錆付き、風化し、灰色の大地に吸い込まれて消える。

夢を見る才能は、そのまま生きる才能であったようだ。

神林光臣

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763y/>

死季

2011年11月21日20時06分発行